

超・仕事人

photograph by Ruita Yamamoto, text by Shinobu Sawada

ミッシェル・ロゼ ロゼ社取締役社長、アートディレクター

新しさを生み出すためには、
チャレンジ精神を忘れないこと。

東京・六本木にある「リーン・ロゼ東京」インテリアショップに足を運んだ時のこと。奥からフランス語の鋭い声が響いてくる。どうやらディスプレイに細かい指示を出している 모양。実はその人こそ、ロゼ社代表でアートディレクターのミッシェル・ロゼだった。

ロゼ社は、1860年フランス・リヨン郊外で、主に傘とステッキを製造する木工所としてスタートした。

それからおよそ100年後の1960年代後半のこと。デザイナーとのコラボレーションにより、コンテンポラリーな家具制作に着手していたロゼ社は、当時の新素材、ウレタンフォームにいち早く着目し、オールウレタン構造の名作ソファ「TOGO」を発売したのだ。

「新素材にチャレンジすることは、すなわち新しいライフスタイルを提案すること。常にチャレンジし、クリエイティブであることが、業界のリーディングカンパニーとして大切なのです」

全世界で約800の販売拠点を運営する彼の言葉は重い。

ヨーロッパのデザイン事情を聞くと「デザイナーがデザインするプロダクトが、アートピース的に扱われる傾向が強くなっています。少し行きすぎでしょうか。そのプロダクトをギャラリーでもショップでも買えるというのが、いまを象徴する現象ではないでしょうか」と鋭く分析する。

一方、日本のマーケットについては、「まるで白痴姫のよう。ポテンシャルは高いが、まだ自覚していない感じ」だという。しかしながら日本の印象は「すごくいい。日本に来ることが、ストレス解消になっています」と語るほどだ。

「ごやかな話の合間には、社長として厳しい顔もぞかせる。昨今の金融危機の影響を、どのように乗り切るかを示さなければならぬからだ。最後に「株ではなく家具に投資しましょう」と冗談交じりに話を締めくくった。



Michel Roset

1949年南フランス生まれ。マネジメント高等学院(パリ)卒業。経営センター(リヨン)で経営学を勉強後、1975年ロゼ社グループに入社。1980年より現職。

pen with New Attitude | 142

『Pen』(マガジンハウス)より抜粋

Michel Roset ミッシェル・ロゼ

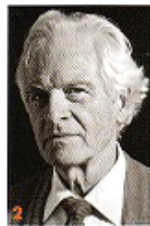
リーン・ロゼで蘇る、フランスのデザイン '70年代の名作「パンプキン」が復刻!

ひと目見ただけでもそれとわかる、特徴あるデザインと独特の色彩感覚でおなじみの家具。ミッシェル・デュカロワやピエール・ポランが手がけた家具は、ロゼのアイコンのようなもの。私たちは素材やデザインを通じて、新しい生活様式そのものを提案し続けてきたのです」と語るの、リーン・ロゼ東京1周年に合わせて来日したミッシェル・ロゼ社長だ。「ロゼの家具は非常にフランス人的な、魂も体

も楽しめるものばかり。それには1960年代の社会運動の解放的な考え方が大きく影響しています」。ポーヴォワールをはじめとしたフェミニストの多くはロゼの顧客だったというが、今もなおその家具は女性を自由な気分させてくれる。「1月には33歳の若手デザイナー、フィリップ・ニグロの新作を発表します。ポランの復刻も続きますよ」。さまざまな色が溢れるというロゼの'09年に期待したい!



profile 南仏生まれ。1860年創業の老舗を兄ピーターと共に牽引。「ヴィンテージ家具が高額で売られる昨今だが、私たちは過去の名作も真正価格と高い品質で届けたい」と語ってくれた。



1 今回発表されたポランの「パンプキン」は、'71年に当時の仏大統領ジョルジュ・ポンピドゥーのためにデザインされたもの。(W105×D82×H71cm)を35万7,000円/リーン・ロゼ東京 ☎03-5549-9012 2 ピエール・ポラン。

